

## 多言語情報提供としての〈やさしい日本語〉—仙台での実践から

菊池哲佳（多文化社会コーディネーター）

本発表では、仙台市における〈やさしい日本語〉での情報提供の事例を紹介し、その現状と課題、および多言語情報提供としての〈やさしい日本語〉の意義について考えたいと思います。

### 1. 東日本大震災における〈やさしい日本語〉

2011年3月に発生した東日本大震災では、外国人被災者に対する情報提供の方法として、〈やさしい日本語〉の有効性があらためて示されたと言えるでしょう。当時、仙台国際交流協会（現在の仙台観光国際協会）は、仙台市が設置した「災害多言語支援センター」を市民ボランティアや関係機関の協力を得て運営し、外国人被災者への情報提供や相談対応を行いました。その際、主に英語、韓国語、中国語のほか、〈やさしい日本語〉によって情報提供や相談対応が行われました。

それらの〈やさしい日本語〉はどのように受け止められていたのでしょうか。1つの例をご紹介します。震災後、仙台国際交流協会（2012）が実施した外国人被災者へのインタビュー調査では、あるブラジル人女性が「ゆっくりやさしい日本語なら、理解できる。『これから、やさしいにほんごでな갑니다』と聞くと安心」と話してくれました。これは、災害多言語支援センターの活動の一環として、震災関連情報を〈やさしい日本語〉でエフエム仙台やコミュニティFMで放送していたことについてのコメントですが、このことから〈やさしい日本語〉の有効性が浮かび上がってきます。

翻って、震災時に日本語が情報提供の「壁」となってしまった事例をご紹介します。東北の地方紙「河北新報」（2011年6月28日付）では、「『避難』言葉の壁厚く 隣人の存在 命運分ける」という見出しで記事が掲載されました。この記事では「高台に避難してください」という防災無線の日本語が分からなかったという沿岸地域で被災したフィリピン人妻たちのコメントが紹介されています。そのうちの一人は、同胞の死を悼み「私も『高台』『避難』の意味は分からなかった。『高い所に逃げて』と繰り返し言われれば、助かったかもしれない」と述べています。逆説的ですが、このことから〈やさしい日本語〉の有効性が確認できます。

### 2. 多言語情報と〈やさしい日本語〉の相互補完性

多言語と〈やさしい日本語〉の関係性について、〈やさしい日本語〉と多言語のどちらが外国人にとって有効なのか、という議論がしばしば聞かれます。これは阪神・淡路大震災を契機として、松田ほか（2000）の研究などにより、「やさしい日本語」が災害時に外国人に情報を伝える有効な方法として考えられたことが背景にあることから、いわば多言語情

報提供の代替手段として〈やさしい日本語〉が考えられがちであることが影響しているように思われます。しかし、多言語と〈やさしい日本語〉は対立的に比較するものではなく、むしろ相互補完的に位置付けられるべきものであると思います。

実際、東日本大震災において仙台国際交流協会が外国人被災者向けに行った支援活動では、英語、韓国語、中国語のほか、〈やさしい日本語〉での情報提供を行ったことは前述のとおりですが、この場合の〈やさしい日本語〉は、英語、韓国語、中国語では情報が届けられない外国人被災者がいることを想定してのものであり、多言語情報提供の一環としての〈やさしい日本語〉だと言えるでしょう。一方で、情報の内容自体が複雑であることから〈やさしい日本語〉にすることが難しいだけでなく、かえって内容が理解しにくくなる可能性があることから〈やさしい日本語〉にしなかった情報もあります。たとえば、福島第一原子力発電所事故に関する情報や、被災建物への「建物被害認定調査」についての情報がそれにあたります。それらの情報は、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターなどの協力を得て、10言語以上の外国語に翻訳し、情報提供しました。

もう1つの例として、震災後に私がコーディネーターを務めて制作した「多言語防災ビデオ」について紹介します。このビデオでは地震への備えや災害時の対応について〈やさしい日本語〉を含む12言語で説明をしているのですが、日本語でのナレーションをどこまで〈やさしい日本語〉にするかは、関係者の間でしばしば議論をしました。例えば、家具の転倒防止をするための「突っ張り棒」について、「突っ張り棒」を平易な表現に置き換えるかどうか判断に迷いました。これについては最終的には、「突っ張り棒」という道具があることを知ってもらうこと、また映像が理解の助けになることを勘案してそのまま「突っ張り棒」と説明しました。このことから、〈やさしい日本語〉は決して「万能」ではなく、〈やさしい日本語〉はどちらかと言うと多言語や映像など、他の情報のかたちと相互補完的であると考えられます。

### 3. 今後の課題

これらのことから、〈やさしい日本語〉は有効な情報伝達の1つであることは間違いないのですが、〈やさしい日本語〉が有効な方法となりうるかどうかは、その時と場合によると考えられます。松尾ほか(2013)は情報保障の基本のひとつとして「情報のかたちを人にあわせる」ことを挙げていますが、どのようなかたちの情報にするかは、情報提供の目的や、情報の受け手のことなどを考慮して検討する必要があります。そもそも、「情報のかたちを人にあわせる」際には、そのために使うことができる時間や、翻訳者などの人的リソースが確保できるかどうかなども重要な要素で、つまりは状況依存的であると言えるでしょう。

そのうえで、〈やさしい日本語〉の今後の課題としては、〈やさしい日本語〉のマインドを持った人びとが(特に行政内に)増えること、〈やさしい日本語〉での文書作成が(特に災害時の文書作成において)容易となるように研究成果が蓄積・普及されることの2点が

挙げられるのではないかと私は考えています。

[参考文献]

- 河北新報, 2011, 「『避難』言葉の壁厚く 隣人の存在命運分ける」(2011年6月28日付朝刊記事) 河北新報社
- 菊池哲佳, 2015, 「多言語情報提供における多文化社会コーディネーターの必要性—多言語防災ビデオ制作の省察から」『多言語多文化—実践と研究 Vol.7』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター
- 松尾慎・菊池哲佳・モリス J.F・松崎丈・打浪(古賀)文子・あべやすし・岩田一成・布尾勝一郎・高嶋由布子・岡典栄・手島利恵・森本郁代, 2013, 「社会参加のための情報保障と『わかりやすい日本語』—外国人, ろう者・難聴者, 知的障害者への情報保障の個別課題と共通性」『社会言語科学 16 卷』社会言語科学会
- 松田陽子・前田理佳子・佐藤和之, 2000, 「災害時の外国人に対する情報提供のための日本語表現とその有効性に関する試論」『日本語科学 7』国立国語研究所
- 仙台国際交流協会, 2012, 「『多文化防災』の協働モデルづくり報告書」財団法人仙台国際交流協会

